

京都大学	博士(文学)	氏名	大 木 崇
論文題目	アリストテレス哲学の研究 — 『自然学』をアルケーとして —		
(論文内容の要旨) 本論文の目的は、アリストテレスの哲学における動ないし運動変化(キーネーシス)と時間(クロノス)の概念について、彼の『自然学』を中心としつつ他のテキストをも考慮に入れながら、その精確な理解を得ることにある。『自然学』という著作は、ほぼ全体を通して生成や運動変化の概念をさまざまな角度から分析することを目的としており、また時間の概念も運動変化の概念と密接に関係づけられながら考察されている。本論文では、『自然学』をアリストテレス哲学を学ぶための「アルケー(出発点)」として位置づけながら、運動変化と時間が論じられているいくつかのテキストを精確に理解することを試み、さらに『自然学』以外での時間についてのアリストテレスの考え方を見るために、『命題論』第九章も考察の対象としている。 本論文の各章の概要は以下の通りである。 第1章で論者は、『自然学』A巻第8章におけるエレア派論駁の詳細を考察している。まず、生成変化という現象の理解をめぐるエレア派の指摘する困難が、アリストテレスの伝承にしたがうならどのような論点から構成されているかが確定され、それに対するアリストテレスの応答が分析される。論者によれば、エレア派の指摘する困難とは、(a)「〈あるもの〉から生成する」と(b)「〈あらぬもの〉から生成する」という二つの角から構成されるディレンマとして解釈され、他の解釈者たちに見られるように日常的な表現を補って解釈することは適切ではない。またアリストテレスの応答は、従来の多くの解釈のように「基体」と「欠如態」との対比を用いながらその一方を強調することによるのではなく、生成変化の起点においてあるものの複合的性格を指摘することにもとづいている。最後に論者は、『自然学』A巻第8章の議論のもつ意味を『自然学』や他の著作との関連において確認している。 第2章では、『自然学』Γ巻における動(キーネーシス)の定義「可能態にあるものの、その可能態としての資格における現実態」が詳細に分析される。論者はまず、この定義を構成する現実態(エンテレケイア)の概念は、これまで多く誤って解釈されてきたように「現実化されつつあるプロセス」として理解されるべきではなく、A.Kosmanが指摘したとおりプロセスの意味を含まない「現実実現されている状態」として解釈されなければならないことを明らかにしている。さらにKosmanも含めた多くの論者によって見過ごされてきたが、定義においてたんに「可能態」ではなく「可能態においてあるもの」という語句が用いられることは重要な意味をもち、ここでの「可能態においてあるもの」は「可能態においてある」ということのいわば担い手であるこ			

と、そしてアリストテレスの運動変化の理解の中心にこのような運動の担い手としての「もの」の概念が位置することが指摘される。

第3章では、『自然学』Δ巻における時間（クロノス）の定義とそれにまつわる諸問題が解明されている。まず指摘されるのは、アリストテレスが時間を定義するに際して、〈今〉という事象に着目しているということである。時間の定義が提示される前後の文脈においても、〈今〉と時間との関係が中心的に論じられており、「二つの〈今〉によって境界づけられるところのものが時間である」（219a26-30）というかたちで、時間を〈今〉によって理解することから議論は出発している。ただしその〈今〉がどのようにして成立するかについてのアリストテレスの議論は、時間の定義そのものの理解、および彼の提示する運動変化への準拠・対応関係にもとづいて初めて精確に理解されるのである。

アリストテレスの時間の定義とは、「より先とより後にもとづく運動の数」であるので、論者はこの定義を構成する「より先とより後」と「運動の数」のそれぞれについて、従来の諸解釈を整理検討することを通じて、その整合的な理解を試みている。この検討によって、従来の解釈ではうまく説明することのできなかった時間の連続性がどのような意味で運動変化の連続性から受け継がれているかが解明され、アリストテレスの時間概念が運動の概念に対して非対称的に依存すること、およびそのような運動の概念が運動体の空間的位置を基本として理解されていることがアリストテレスの思考の特質として指摘される。

第4章では、『自然学』Ζ巻において論じられているゼノンのパラドクスのなかからとくに「飛ぶ矢は静止している」というパラドクスが検討される。アリストテレスがゼノンのこのパラドクスに言及している文脈を踏まえることによって、このパラドクスの鍵が〈今〉と時間の概念理解にあるということが指摘される。すなわちこのパラドクスは、〈今〉について当てはまることを時間にまで不当に拡張することによって成立しており、それに対するアリストテレスの解決は、〈今〉と〈時間〉の関係を明らかにすることにもとづいている。同時に、このパラドクスについてこれまでに提出されてきた解釈のなかのいくつかは、アリストテレスの時間概念を誤解することによって由来するものであり、これに対して論者が読みとったアリストテレスの動と時間の理解がアリストテレスの議論をよりよく理解させるものであることが示される。すなわち、二つの概念についての論者の理解がアリストテレスに即していることが裏づけられている。

第5章では、いわゆる「海戦問題」として知られている、『命題論』第九章における未来の出来事に関する命題とその真理値との関係という問題が考察されている。論者によれば、問題となっているのは二値原理 (the principle of bivalence) にもとづいて未来の個別的出来事が「不可避である」という意味で必然的であるかどうかということである。そしてそれが不可避であることを導いたうえで帰謬法によってその不可

避性を論駁するために提出されるアリストテレスの二つの決定論的議論(18a34-18b9/18b9-18b16)は妥当なものとして理解されるべきである。こうした解釈にもとづいて論者は、この議論からどのような時間概念がアリストテレスに帰されるべきであるかを示唆している。

最後に、以上の考察の成果を全体として俯瞰することによって、論者はアリストテレスの考察の二つの特質を確認している。まず第一に、アリストテレスの探究の方法論が主題に応じてある種の可変的性格をもつことが指摘される。すなわち運動変化や時間の概念を論ずるに際して、それぞれの考察課題において分析の道具として彼自身がそのつど適切と考えるものを用いており、同じ一つの概念を分析の対象とする場合であっても異なる側面に着目することによって議論の仕方が異なることがありうるのである。第二にアリストテレスの動(運動変化)および時間の理解における「もの」の概念の重要性である。動の定義においても定義を構成するのはたんなる「可能態」ではなく「可能態にあるもの」であった。また時間の定義を構成する運動の概念も、運動体という運動の主体としての「もの」を媒介として理解されている。論者は、アリストテレスの自然像がこのような「もの」の概念をその中核としていることを確認し、このことが含意する哲学的意義を考察することを今後の課題として展望している。

(論文審査の結果の要旨)

アリストテレスの哲学は、使用する概念および理論的枠組の点で自然の探究 (ta physica) をその出発点 (アルケー) としている。この事情は、彼のいわゆる「形而上学」 (ta meta ta physica) が、その名称はアリストテレスに由来するのではないとしても、「自然学のあとに学ばれる学」として構想されていることから容易に理解できる。

本論文は、このような性格をもつアリストテレスの自然探究のうちでも自然的事象の諸原理を考察した書『自然学』をとりあげ、動ないし運動変化 (キーネーシス) と時間 (クロノス) という、自然の理解を支える最も基礎的な二つの概念の解明を試みたものである。したがって本論文は、その表題が示唆するように、アリストテレス哲学全体にとっての根本的原理 (アルケー) にかかわる考察であるといえるだろう。

そのような重要な主題に真正面から取り組んだ本論文は、以下のような成果を挙げている。

第一に、アリストテレスの動の概念について、本論文は過去の諸研究よりもアリストテレスのテキストに即した理解を提示している。アリストテレスは動を「可能態にあるものの、その可能態としての資格における現実態」と規定しているが、これはデカルトやロックによって愚弄の対象とされたほどに難解あるいは不明確だとの悪評を買ってきた。この規定の理解に大きな貢献をおこなったのは1969年のコスマンの研究である。コスマンは定義項に現われる現実態の概念が、この箇所では「現実化のプロセス」を意味するという従来の支配的解釈を批判し、基本的な意味どおり「実現している状態」として理解すべきこと、そしてそのことによって初めて理解可能な意味をもちうることなどを明らかにした。しかしこのコスマンの解釈も必ずしも受け入れられたとは言えず、異論も少なくない。論者はコスマン以後に提出されたさまざまな見解を整理したうえで、解釈の基本線についてはコスマンを適切に擁護する。しかしさらにコスマンも見落としていた「可能態にあるもの」という概念の重要性を指摘し、アリストテレスの動の理解において運動変化の主体としての「もの」という概念がその核心にあることを明確に示した。関連文献のほぼ網羅的な探索と的確な論点の整理にもとづく論者の議論は説得的であり、アリストテレスの動の概念の理解にたしかな貢献をおこなったと高く評価できる。

第二に、アリストテレスの時間 (クロノス) の概念をめぐっても、本論文は従来のさまざまな解釈の問題点を摘出しより適正な解釈を提示している。アリストテレスは時間を「より先とより後にもとづく運動 (キーネーシス) の数」と規定したが、論者はこの規定を構成する「より先とより後」「運動の数」というそれぞれのタームについての多くの誤解を正すとともに、緻密な分析の積み重ねによって従来よりも整合的で納得のいく解釈に至っている。とりわけ、定義項の「より先とより後」が時間を前提とせず運動のみに依拠してどのように理解されるべきか、また時間の連続性が運動の

連続性をいかなる意味で継承しているのかという点は、従来の解釈によってはうまく説明されていなかったが、論者はこれを運動の場所的拡がり注目して解釈し時間の運動に対する依存というアリストテレスの理解の合理的性格を明らかにしたことは、大きな功績である。

以上の成果にもとづいて、論者はさらに、「飛んでいる矢は静止している」というゼノンのパラドクスに対するアリストテレスの解法、および『命題論』第9章での「明日海戦が起こる」という言明の真偽性をめぐるアリストテレスの議論を検討している。いずれもアリストテレス研究者だけでなく現代の哲学者も多様な意見を表明している興味深い論題であるが、論者はテキストの註解的な分析と数多くの解釈の再検討を通じてより説得的な解釈を提示するとともに、それが論者の読みとったアリストテレスの動および時間の概念と整合的であることを示し、自身の解釈に確証を与えるのにかなりの程度まで成功している。

また本論文の分析の優れた特質として、古代や中世のアリストテレス解釈を尊重し適切に利用していることが挙げられるだろう。近年のアリストテレス研究の多くが同時代の研究者の解釈にのみ注意を向け、ときに煩瑣で皮相となる傾向があるなかで、古代の註解やトマス・アクィナスの解釈にかえって的確な理解が見いだせるという論者の指摘は、アリストテレス研究の現状に対する警鐘ともなっている。

以上のように特筆すべき成果を挙げた本論文であるが、なお改善の余地があることも指摘されねばならない。まず、論者が過度に謙虚なために考察が特定のテキストの精確な理解を提示するにとどまり、アリストテレスの動と時間の理解が歴史的また理論的観点からどのような特質と意義、そして問題点をもつのかという点にまで踏み込んで論じていない。このことは、哲学および哲学史の論文として不満を感じさせる。また論者が検討した動および時間の概念とアリストテレスの自然学全体の構想との有機的連関が十分に説明されていないことも指摘されねばならない。ただし、これらの点を論者はよく自覚しており、とりわけ後者の課題に対しては論者が現在在籍するオクスフォード大学に提出すべく作成中の別の博士論文において応答が与えられる予定とのことなので、期待したい。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2011年8月31日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。